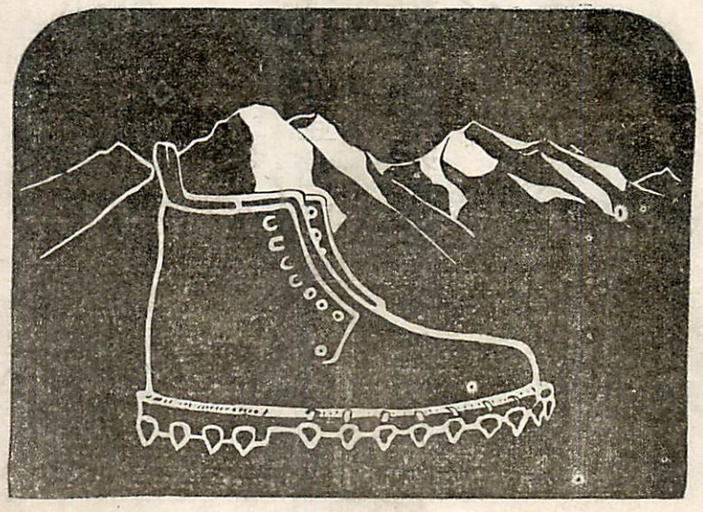
375



登山靴とスキー靴

東京市本郷區四丁目角

太田屋靴店

電話小石川四七一二番

振替東京六一二七番

豐富な積雪!!

潤澤な斜面!!

充分の設備!!

五色温泉

山形縣南置賜郡山上村

板谷驛にて下車

宗川旅館

――拔　章――

きびしい寒さと烈しい風と、深く積る雪とに充ちた長い冬を持つ北國の住民の冬期間の生活を、荒い自然と戰つてゐる生活だとか、荒い自然を征服しつゝ營んでゐる生活だとか云ふ。けれどもそれは外部から、第三者が觀た上での解釋に過ぎない。實際それを營んでゐる者の氣持からすれば、それは決して戰ひではない。從つて征服でもない。寧ろさうした逆らふ氣持だけでは、到底堪へ得るものでもない。さうかと云つてそれは無論屈從でもない。壓服されてゐるのでもない。屈從とか壓服とか云ふことも、戰ふ、爭ふ、逆らふと云ふ事から來るのだ。爭ひや戰ひのないところに、屈從や壓服のあるべき理由がない。またそれは決してあきらめでもない。あきらめは消極的だ。しかし事實はそれと正反對である。

私はその北國人の荒い冬に生きる氣持を、どちらかと云へば自然との合体だと云つた方が當つてゐると思つてゐる。冬そのものに對しては彼等の心は極めて安らかだ。自然はまたかうした氣持で對する者に、不思議に惠みを與へてくれる。

――相馬御風――

1

冬の十勝岳

（一）承前

板橋敬一

谿の中では感ずることの出來なかつた吹雪はこの吹きさらしの斜面一帶を領して、ケーブルは物凄い唸りを立てゝ怒號してゐる。熱い茶をすゝり間食をする。Tは鼻が感じなくなつたと云つてしきりにすり始めた。思ひ切つて谿に逃れボーゲンを畵いて下る。鑛山事務所の側のスロープで練習をし、それから事務所で晝飯を食ふ。Tの鼻はみじめになつた。Eも足の指があぶないと云つてゐる。

その夜ストーブをかこんで山の男達は皆して、ヨードラーを唱つた。グリンデルワルドの灯が見えるとはるか山の下に見える下富良野の市街地を指してTはどなつた。ヨードラーは消えて行く。寂しく薄れて行く。前の前の年の晩春だつた慶應の人々に始めてこの歌を聞かされた。そして美しい團結をうらやんだ。もうそれから二年にもならうとしてゐる。すべてに餘裕のない生活は自分のあらゆる若い元氣を奪ひ去つて了つた。そこに寂しい社會がある。そこに情けない人間の群がある。

『ハリホー、ハリホー』思ひ切り自由に唱ひたい。東京の自由な生活を憧憬れる。早く日本アルプスに歸りたい。古いころからの數々の憶ひ出がまざまざと浮び上つて來た。

ヨードラーを唱ふ若者の側に可哀さうな犬は度々近づかうとして、すげなく留守番の男から阻止されて居つた。男は犬

にやるやうにと前の主人から頼まれてゐたミルクをしきりに湯でといて飲んでゐた。

『犬に飲ませるやうにと云つてましたがね、どうせ飲みも食ひもしないんですよ。仔の方はいくらでも食べますがね』

それでもくどくどと辯解をしてゐた。

犬はその次の朝には死んでゐた。流しの奥の板の下に身を隱して、氷の上に身体をつつぱつたなりに死んでゐた。——その夜男は先に寢たので後に殘つた自分達は着物をすつかり乾燥してから犬をストーブの側に入れてやつた。もう身体はすつかり萎え切つてゐた。方向も定まらずに大きな身体をよろめかしてゐた。しなび切つた乳房は、氣味の悪い色をしてだらりと垂れ下つてゐた。しまりなく黑斑のある乳房をひきづつてストーブの側によろめいて來て、赤く熱した鐵板にしきりに鼻をうちつけてゐた、もう駄目だなと思つた。陰萎な乳房が妙に死と云ふことを豫感せしめた。そしてとうとう次の朝には死んで居た。

『犬はね、決して自分の飼はれてゐた家ぢや死ぬものぢやないよ。きつと身体を隱すかなんかして死ぬんだね。人の家に行つて死ぬんだ。それもわからないやうに死ぬんだ』Iは神秘的な眼をして云つた。

寂しい思ひを抱いて山に出發した。昨日より餘程遲れてゐた。鑛山の人々は今日『火口』まで登ると云つてゐた。同じやうに昨日の道を傳はる。谺の樣子は一夜の中に全く變化してゐた。鐵索小屋に着いた頃はひどい風になつた。そして雪は止んだが濕つぽい霧が朝つからしつきりなしに降つて了つてゐた。まつげは例によつてくつつく。それでも小屋からトロ道を少し行つてその終點から又續いてゐるケーブルに沿つて登り出した。雲は美しくいろいろの花の形を畵いて氷つてゐる。四邊は全く霧にとざされて何物も辨じ得ない。たゞ鐵索に傳はつて登つて行く。と足下から聲が起つた。一齊に人々が聲を合はせて呼んでゐるのだ。鑛山の人達だなと思つた。そしてもしやしたら火口の小屋がこの下にでもあるのではないかと考へた。しばらく下つて見る。とむくむくと下から噴煙が騰つて來て硫黃くさい。危ないと思つた。それは始めに登つた湯の澤だつたのだ。そして霧の合ひ間合ひ間に谿の向ふ側を登つて行く人々の群が見えた。その人達はズンズン登つて行きながらも聲をからして何やら叫んでゐる。自分達も亦鐵索に沿ふて登り出した。段々聲も遠くなり、斜面も大分登つたやうに思ひ出した頃再び足下から聲が起つた。礦山の人々はそこに自分達を迎へて呉れて小屋は直ぐそこだぞと怒鳴つてゐた。谿に下りるとひどい硫氣にあてられた。眼にしみついて來るので急

いで小屋に入る。雪に埋もれてゐる中をもぐつて入つて行く。硫氣は小屋の中にまで襲つて來てゐる。氷も雪もあらゆるものが皆黄色なのだ。

『どうだい。今日は鼻はしばれなかつたかね。』

とTをつかまへてSさんは笑つてゐた。炭は五十俵も上げてあるんだからと云つて山の人々は陽氣に炭をたき出した。全くその設備と來ては大したもんだ。炭火にあたりながら飯を食ふ。實に立派な避難所だ。一月に入るとこゝに一週間交代に三四人の鑛夫が寢泊りして硫黄を掘るのだと云つてゐた。こゝから頂上まで一時間。實際大したもんだ。

火口を見に行くと山の人達は云ふので、自分達は早速スタイグアイゼンをつけて小屋を飛び出した。そここゝに硫黄は噴き出してゐる。眞紅な爐から白い煙が上つてゐる。自分とTは一番上の火口に行くと云ふ二人の礦夫に從つて登つて行つた。岩と氷のみの世界だ。それに風は麓から吹く。鶴嘴とスコップを持つた鑛夫の後から風に吹き上げられるやうにしてしばらく登ると鐵索の起點となる門がある。それからが磨鉢の底見たいな火口へもぐり込んで行くのだ。鼻で呼吸をしたらたまらない。ですつかり口を手拭で被つてから、口だけでハーハーと強い呼吸をする。段々と岩の上を滑りながら釜の底に下りて行く。とてもたまらない。ひどい煙だ。眼さへ開いておられぬ。

『なに、火口の中へ入つて了へばこんなことはないよ』

と鑛夫達からなぐさめられながら霧の中を皆目わからぬ方向へ向つて進んで行く。不思議な悲壯美に打たれて了ふ。と結晶した硫黄の山につき當つた。それを登ると眞紅な硫黄が火ぶくれのやうにうづいてゐるのが見える。鶴嘴をもつた男は勇敢に身を進めてその口を破つた。恐ろしい煙が湧き上る。赤い溶け切つた硫黄がとうとうと氷の上を傳つて流れ出す。足尾で見た溶鑛爐の口を切つた時の恐ろしさだ。風が渦巻く。煙は左右に流れる。忽ちにして自分達は煙に被はれて了ふさしまねがれるまゝに煙のない方へない方へと、黄色い硫黄の塊の上を逃げまどふ。赤い溶鑛はあたりの雪をなめるやうにしてとろとろと流れて行く。それにも近づけない。風はひとしきり恐ろしく渦を卷いた。自分達は全く煙の中に鎖されて了つた。眼をあける。と針でさすやうにしみて來る。空氣がないんだ。口でする呼吸も覺束ない。思ひ切つて鼻でやらうとする。と頭蓋を下から鐵棒ででも突き上げられたやうに飛び上る程の刺戟を感ずる。生氣を失つた。鑛夫等も地に顔をかぶせるやうにつんのめつて息をしてゐる。二人はもう苦しい境を通り越してゐた。しみじみと生命を痛感した。引き

返すと云ふ旨を鑛夫達に傳へて二人は火口底を這はんばかりにして逃げ出した。霧はすべてを包み隱してゐる。後に殘つてゐる二人はどうしてゐるのかもわからない。自分達は何よりも苦しくてたまらないんだ。地獄だ。恐ろしい硫氣だ。必死にもがいて火口を飛び出したときの喜び。ほんとに蘇生した時のやうな爽やかさになつて冷たい外氣を吸ひ入れた。空氣は有難い。思ひ切り充分に二つの肺に空氣を吸ひ入れた。始めて空氣を味はふものゝやうに氣持よく新らしい空氣を吸ひ込んだ。

山はとうとう晴れなかつた。霧は無性に飛び交つた。小屋に入つてからTは

『世の中に何と云つたつて硫黄程こわいものはない』

としみじみその恐ろしさをかこつてゐた。

その中にぽつぽつと火口から鑛山の人々は歸つて來た。小屋に入ると思ひ合はせたやうに苦しい咳をし始める。中には鼻血を出してゐるものも居る。身体は誰も彼も眞黄色になつてゐる。ふと自分の口にしてゐた手拭を見てその息のあつたところの餘りの黄色さに驚きの聲をあげた。それでも鑛山の人々は愉快さうに笑戯を云ひ交したり、食べたり火にあたつたりしてゐた。鼻血を出さうが、血のまじつた痰を吐かうが何一つ他の人に對して同情するのでもなかつた。總ての人々は一人〳〵で樂しく生きてゐるのだつた。嚴冬にこの高山の頂近くで硫黄を掘る。しかも人並はづれたその苦しさ。さうしてまでもその人々等は生存權をあくまで主張してゐるのであつた。燃えさかる硫黄の上に薄く張つたクラストを力まかせに鶴嘴で割つてゐるのだ。硫氣にまかれながらも雄々しく戰つてゐるのだ。ひどい霧の中をもカンヂキをはいて氷帶にまで登つて來るのだ。それでゐて大した不平もない。そして大した仕事でもないやうに考へてゐる。生活だ。生活だ。こうした山の上にまでも生活の波が根强く打ち寄せてゐるのだ。N君の親父――それは札幌のある役所の高い位置を占めてゐた官吏であつた――の死が胸にひゞいて來た。こゝをはじめて開拓したのはN君の親父だつたのだ。そしてその人は自殺してゐた。秘やかに葬むられてゐた。ロシア風の郊外に近い大きな建物から禪寺に雪どけの道を、寂しい葬列はつゞいて行つた。それでその人の一生は終つたのだ。硫黄はもえ盛つてゐる。地の底をゆすつてふき上つてゐる。こうした高い山の上にまで雄々しくふき上つてゐる。そして幾人もの人々がそのまはりに果敢ない生の營みをつゞけてゐるのだ。

小屋の人々は離れ離れに山を下り出した。自分達もその人々に從つて湯の澤の右の大澤を下り始めた。鑛山の人々は親

十勝岳より見たる奥十勝連山　　N生

切に案内して呉れる。自分達が急斜面でステムボーゲンをするのを手を打つて喜んで見て呉れる。ほんとにその人達は無邪氣なんだ。

『うまいぞ、うまいぞ、ほりや、ほりや』

四股をふんで力瘤を入れて頭の上で應援をして呉れる。ころぶと一齊に『ワーッ』と聲をあげる。急斜面でさうした聲を後にしながらキリキリ舞のボーゲンをやる。谿はせまい。グイグイと落ちて行く。岩が出る。氷が出る。無邪氣な滑降は樹帶に入る高原の頂までつゞいて行つた。山は一時賴りなく晴れ渡つた。礦川の人々とそこで別れて明るい山の風物を享樂する。麓の針葉樹は美しく輝き出した。富良野岳の濃い森林は紫色にかゞやく。登つた時のスプールがこまかいジッグザッグを狹い谿一ぱいに美しく畫いてゐる。高原の頂でしばらく物凄い直滑降を試みた。谿底へ向つてぶつ飛んで行くときの心持よさ。何回も何回も試みる。輕い疲れを覺えてやすらかに高原の空氣をすひ入れる。我高きにありと麓の山河をながめて叫びたくなつた。その中に又霧が襲ふ。そして又逃げるやうにして溫泉にかへつて行つた。

次の日は朝から吹雪いてゐた。思ひ切つて下山することにした。

足なえの仔犬は親を失つたためだらう。薄暗い納屋の隅に隱れてくんくんとしきりにうなつてゐた。風は針葉樹林をゆすつてかるい雪をとばしてゐる。妻を失つた男は一人取り殘される悲しみをあらはしもせずに冷やかに見送つてゐた。とうとうスキーをやると云ふ奥樣には逢へなかつた。何でもこれから旭川に家を構へると云ふ話だつた。ともあれ流轉の人生なのだ。

小屋から少しはなれた針葉樹の森元には、まざまざと雪を掘り返へした後がうかゞはれて、昨日からの新雪は輕くその側の孤らしいものゝ上を被ふてゐた。墓だ。――

四邊は美しい森だ。グイ松のきらびやかな枝が銀色に光つてゐる。幸福な奥津城だ。神聖な永眠の所だ。

垂れ下つた針葉樹の下枝は神々しい感じをわき立たしめる。

『永年飼つてゐた犬だから、ひよつとしたらとりに來るかも知れないからね』

男は昨日、犬の死骸を小屋の附近に埋めたことを持ち前の冷やかな調子で話してゐた。

あのしなびて垂れ下つた乳房。黑い斑點。どすぐろい死の前兆。氷つた屍。

それを引取りに來るのはスキーをやること云ふ奥樣のやうな氣がしてならなかつた。しかもそれは雪女を思はせるやうな靈の見え透いた美しい人でなければならなかつた。

橇道をぐいぐいとすべつて行く。市街地に出ると大晦日の淋しい氣分が夕暗の中にひたひたと漂つてゐた。寂れた樂隊の音が遠くから聞えて來た。

——二四・一・二九——

冬の十勝岳（二）

伊藤秀五郎

時　日　二四・一・二五　一・二七

同行者　小森五作、藤江永次、佐々木政吉、田口鎭雄

頂上こそは極められなかつたにしろ、强烈な吹雪の中を、青く澄んだ氷の端と眞黑な岩の頭がによきによき出てゐる急斜面を、きりきり舞ひのステムボーゲンで下りて來た四日間の十勝岳は、Iを除いてはそれまでに未だ規模の廣大な冬山に面と向つたことのない私達にまで、山に對して私達の進むべき方向の大きな暗示を與へてくれるのに十分役立つた。

以來私達の頭の中には、氷と雪に閉ざされた火口に近い鑛山小屋の有樣や、氷附いた鐵索と吹雪との交響や、或は又、全く自然美の極致とでもいひたい樣な森林帶の景觀などが、間斷なく往來した。もう一度行かなければといふ考へが可成强く私達を支配した。

五人のものは、溢れるばかりの喜びを胸の中に押へながら、北に向ふ例の十一時の列車を待つてゐた。リックの重みがしつくりと肩に應へる。

翌朝七時に上富良野に着いた私達は、朝食をしたためてから滑り出した。空は青く晴れ渡つて、十勝岳を中心とした富良野、美瑛などの連山が、くつきりと勇姿を現はしてゐる。頂上のあたりに雲を卷いた十勝岳がたまらなく心を唆る。相變らずの良雪を喜びながら、橇道を傳つた下の鑛山事務所に着いたのは十二時近くであつた。この前の時は寄らなかつたのだが、こゝのSさんは若い愉快な人である。快く私達を迎へてくれて、中食に赤飯を振舞つてくれた。今日は東宮の御成婚の日なのである。

Sさんは今朝はじめてスキーを履いてみたといふ。

『一尺行つてはステーン。三尺行つてはステーン』

太い聲だ。顏は日に燒けて赤銅色である。

此處から上の事務所までは、一里余りの上りである。私達五人は、人馴れぬ雷鳥の羽ばたきに破られる靜寂の沈默の中を、白樺や針葉樹の間を縫つて深く刻まれた橇道に沿ふて上つて行く。いつのまにか空は雲つて了つた。事務所に着いた時は、もう四時に間もなかつた。今夜の宿はこゝである。リックを置いて、四五町上の橋の先まで行つてみる。前の時よりも雪は二三尺多いが堅く締つてゐる。ラッセルの苦勞はなくなつた。

灰色にくすんだ鈍い光に包まれた太陽は、針葉樹の陰に隱れて了つた。明日の天候を祈りながらスキーを脫ぐ。

さあ私達は、このささやかなる晩餐に感謝しよう。私達の空き切つた腸は、この温い味噌汁と、柔かい豊富な飯とより外に何物をも望みはしない。そうして食後に熱くて甘いココアでも飲んで、安らかな眠りの上に一日の疲勞を回復しようではないか。

外は風が强くなつたらしい。山が唸つてゐる。明日の天候を氣遣ひながら、寢床に潛り込んだ。

翌朝宿の人に起されるまで、私達はぐつすり寢込んで了つた。六時少し過ぎである。昨日の豫定ならば、もう出發すべき時刻であつた。飲を食つたり、辨當を詰めたりして、いよ〳〵スキーを履いたのは八時であつた。

太陽の光こそ見えなかつたが、晴れさうに思はれた。Oさんも、今日は大丈夫だらうといふ。二日前までは、から〳〵の晴天が一週間も續いて、あのスキーをやる人達もこんな時に來ればよいと、再來を約した私達のことをしきりに噂してゐたさうである。

こゝから森林帶を拔けて、急な斜面に打當る處までは先に幾度も往來したところである。昨日交替して火口の小屋まで登つた鑛夫達の橇の跡は、昨夜の强風の爲に殆んど消されてはゐたが、雪が締つてゐてラッセルの必要がなかつたので約一時間で達することが出來た。

澤は雪に埋れて、可成り形を變へてゐた。火口に近いあたりから上は、霧がかゝつて見えないが、鐵索の終點にある小屋（此處には人はゐない）がはるか上に立つてゐる。この前、最後に下つた澤を選んで、ジイクザックを切り出した。風の爲に雪面に小さな凹凸が出來てゐて歩きにくい。一時間ばかり續けて澤が可成り狹まつたところで、强烈な硫黄の蒸氣に襲はれた。小屋までは長い距離ではなかつたけれど、早くこの苦痛から逃れる爲に、スキーを脫いで雪の上に深く差し込んで、ザイルで固く縛つて目標に赤旗を結び附けてから小屋を目指した。頂上は風に唸つてゐる。オブタテシケ連山の有名な霧が間斷なく襲つてくる。一寸した晴間をみては、漸く小屋の在處を見出すことが出來た。雪にすつかり埋れて明り取りの窓が一つ見えるばかりである。中に飛込むと、四人の若者が豆を煮ながら圍爐裏を圍んでゐた。皆顏馴染である。

『やあ、とう〳〵來なすつたね、あんなに苦しんでもやつぱり頂上さ登りたいだね』

テルモスの熱い口が開かれ、バタを挾んだビスケット（私達はいつも山に之を携へる）や乾葡萄や乾芋などが出される。

私達は、こゝでゆつくり温りながら、辨當を開いて、四方山の話を語り合つた。私達の山に登る心持の總ては理解出來ないにしろ、彼等も又山登りといふことには少なから興味を持つてゐるらしい。その中の一人が私達と一緒に頂上まで行かうといふ。Sといふ若者である。

十二時半に私達は小屋を出て頂上に向つた。私達がクランポンの紐を固く締めて居る間に、Sは手早く棲子に三本足の金樏を着けて、小屋の前に立つてゐた。

Svaevbilleder av Kronprins
Olav fra Holmenkoldagen 1922

ノルウエー皇太子 Olav 殿下のジヤムプスタイル

皇太子は幼少の頃よりスキー競技に非常に御趣味あらせられ自らスキージヤムピングの實際的練習を遂げさせられ 1922, 1923 年のホルメンコーレンのジヤムピング競技會に Young Class に參加せられて居る。そして 1923 年の年報によれば、第一回目に 38 米の素張らしいレコードを作つて不倒であつたと云ふことである。

霧は左程濃密ではなかつたが、依然として晴れなかつた。小屋から第一の火口まで二十分、それから頂上までの四十分は、かなり急な斜面の登りである。

札幌を出る時豫期した樣な、眞青なてら〳〵な氷は何處にも見出せなかつた。ただ一面に堅雪である。何處からともなく響鳴する靡々の叫び、霧を衝いて雪陵を登る六つの黑い影、そして總ての事象を超越してはるかに人臭から遠ざかつた威嚴めしい沈默の中に歩むアイゼンの軌り。

午後一時三十分私達は遂に二〇〇〇米の山頂に立つた。目的は達せられたのである。去年の七月、黎明時の旭岳頂上にたつて、白光の雲海に聳ゆる連綿たる十勝連山を望んで以來、想ひは常にこの山頂に集められてゐた。雪白の十勝岳を想像する毎に、湧沸とした血潮の高鳴りを聽いた。私の心の祕奥に、小さな安心と愚撫の蠢動と、そして常に心の飛躍を與へてくれるものはこの純白な冬の山々である。

山頂にあつても寒氣は餘り烈しくなかつた。雪に埋もれた三角點をバックにして、揃つて寫眞を撮つたり、テルモスの熱いテーを啜つたりする餘裕さへあつた。少し下つた時、霧が霽れて來た。噴火口が眞下に瞰下され、富良野嶽とそれに續く尾根とが漸く現れ出した。私達が是等の寫眞を撮つてゐる間、Sさんは雪の上にばたりと仰向きになつて休んでゐた

二時半に四人の者に別れを告げて小屋を出た。澤の Skidepot に至つて、アイゼンをスキーに換へ、滑降を始めた。雪が締つてゐるので自由自在なステンボーゲンのシュプールを描くことが出來た。それはほんの一瞬間の樣に思はれた。見返へればはるか彼方に噴煙が煙つてゐた。

Oさん達に厚く禮を述べて、事務所を別れたのは四時を過ぎた頃だつた。五時を過ぎれば日は暮れる。それまでに下の事務所まで下りなければならない。カーブの多い急な馬橇道だからである。ステムをしても恐ろしい程のスピードである

下の事務所では私達の爲にわざ〳〵五日鮨を造らへて待つてゐてくれた。こゝから私達はラテルネを灯して再び緩やかな馬橇道を傳つた。もつて來いの傾斜である。上富良野まで三里、殆んどシュトックを用ひずして滑り續けたいつてもよい。雪原に搖らめくラテルネの輝、私達は全くゆつたりした心持になつた。グリンデルヴァルトのヨードラーの響がゆるやかに暗に吸はれてゆく。今私達は烈しい苦闘に凱歌を上げて、休息へと急ぐ勇者である。

顧れば私達の過ぎ來つた行程はまことにささやかなものである。然しそれは、私達の心にまで如何に大いなる喜びをもたらしたことであらうか。そしてかく純白なる山脈は、休息へと向ふ私達にまで、如何ばかり魅力ある芳香を放射てる結晶體と見ゆるものぞ。

（二四・二・六）

スラローム競技スタイル審判法に就て

中野　誠一

本稿を起す目的は、第二回全國スキー選手權大會スラローム競技スタイル審判法に關する批判を中心として書くにある。從つてスラローム競技全體に渡つて論じない。故に若し、此稿をデヂケートする事が許されるなら、私は『第二回全國スキー選手權大會スラローム、スタイル審判員諸氏へ捧ぐ』と書く。

スキー術上スラロームと稱するものは何れか一つの又は二つ以上のダウンヒルターンを利用しての弧形滑走である。クリスチアニア又はテレマークスラロームと云ふのは此のダウンヒルターンに於てクリスチアニア又はテレマークを利用する事である。スラロームは決して個々のダウンヒルターンでは無い。連續したターンである。從つて此の競技に於てもスタイルの審判を行はんとすれば其スタートよりゴール迄の全體を審査す可きである。第二回全國スキー選手權大會スラローム競技に於は六本のポールを廻轉する

に各ポールの内側に一名宛の審判員が立つて、個々のダウンヒルターンに就てのスタイル、ジャツヂングが行はれた實に誤れるの甚しきに驚く。考へるに此の方法は昨年第一回大會の範にならつた樣である。若然らば審判者の見界の狹少を笑はずには居られない。昨年は規則の性質上左樣にするを豫儀なくしたのであるが、今年はより完全と稱せられた規則の下に行はれて、而も此誤謬が在る。徒にスキーを弄ぶの輩ならば兎も角、苟も本邦スキー界に重きを以つて任ずる人の行つた事と思はれない。

スタイルジャツヂの位置はスタートの近所に一箇所、ゴールの如くに一ケ所郡合二箇所に二名又は三名づゝ配するか、或は中央部近くに左右二ケ所に別れて位置す可きである。万一、コースの全體を通觀し得なければ最も多く見える場所上下二ケ所に配す可きである。かくして二方面より審査する時は最も公平安全である。

今六名のスタイルジャツチが各ポールに立つてクリスチニアスラロームのダウンヒルターンのみを審査したとする百歩讓つてダウンヒルターンの中間の斜滑降は各員が何れか一方即ち自己の持場のターンの上又は下の分を審査したと思ふ。そして其競技者の中一名は右廻りのターンに於ては前出スキーに委重したクリスチアニアを行ひ左廻りには後スキーに委重したターンを行つたとする。此場合スタイル（スタイルの善惡は後述する）が一樣の程度であつたとする。他の一名は左廻りも右廻りも同樣に谷足委重のターンを以つて終始し、其スタイルも前者と同樣であつたとするなら、兩者のスタイルの得點は同一になる。然し此兩者のスタイルは全体としてはたして同程度であらうか？　明に前者の方が劣等である。前者のスタイルは一種の跛行である。スラロームを行ふ者の中比較的上達者に於ても往々此れを發見する。後者は立派に左右均等に足を使つて居る。若し全體より此兩者の競技を審査するなら、明に後者のスタイルは前者のそれより上位の得點を與ふ可きである。

此一事を以つてしても今回の審判方針の不當であつた事を思はしめるのである。猶一例をとる。六回のダウンヒルターンの中一名は右廻り三回左一回、他の一名は右二回左二回だけ悪いスタイルで通過したとする。區分的審査の結果は兩者共に同點となる。然し其のランナーの本質を考へるなら其處に多少の差異を見る。前者は完全に左廻を行ひ得るものと見得るし、後者は全然左右に於て不完全であると見得られる。然る時は前者が後者より上位の得點である可きであらう。

既に筆者は其の根本方針に就て其の不當なるを指的したが、更に其スタイル審判上個々の問題に觸れねばならない

今回の審査員諸氏ば自己の審査の標準を奈邊に置いたか

◇　◇　◇

◇　◇　◇

クリスチヤニヤ　　本田治吉

を知る由が無い。何となれば競技開始前、當然與ふ可き其標準を示さなかつたからである。或はクローズドクリスチアニアは不可である。リフトは許されない等の點に就ては注意があつたかも知れない。然し審査の標準に就ては説明が無かつた。ジャムブの如きもので其スタイルコンテストの標準は苟もジャムパーたる者が心得なければそれはジャムパーの罪である。然るにスラロームのスタイルコンテストは今回初めて行はれる事で然もランナーは其の標準を奈邊に置くか區々の考を有して居る。其際標準を指示する事なくジャツヂングをやれば可成り變なものである。丁度ジャツヂの標準とランナーの標準とが合致すれば幸福であるが一致せないランナーは不幸である。まるで投機的な心と心との山の懸け合ひである。チャンスである。一が出るか六が出るかの勝負事である。スポートとしてかゝる事は最も恥ず可きである。

然し個々のジャツヂの置いた標準に就ては想像するに難くない。そして筆者は其標準が審判員諸氏の單なる主觀に基くものであつたと確信する。それは筆者の見て想定した審判結果と實際の結果とには大きな差があつた事で明瞭である。筆者の想定にも無論主觀が無いとは云はない。然し筆者の想定には筆者としての標準がある。而して其標準はスラロームのスタイルジャツヂングに於ては何れのジャツヂマンも當然用ひる可き客觀的標準である。而して其客觀的標準が實際とは大差を有して居た以上、其審査標準はジャツヂマンの主觀によつた事は明である。

スラロームのスタイルを主觀によつて決する、即ちジャツヂマンの好き嫌いによつて決するのは甚だ遺憾である。同じスタイルでも甲は良くとも乙は不良とする。特に地方的にはテレマークのスタイルに大差がある。具体的例をとるなら、テレマークの脚が平行四邊形、膝が直角と云ふスタイルは筆者の最も嫌惡するスタイルである。特に其の上體に於て直立し、腕を殊更に左右に奴凧の如く伸したスタイルは若し筆者の後進者が試みるなら慘酷にのゝしられ、强制的に矯正せられるスタイルである。其スウイングに適當のテレマークジツツエンに體を落し、腕はボディスウイングに必要な而して遠心力による外倒を防ぐ爲適當に振り、上體は前スキーのステアリングアクションを助長させる目的で適當に前屈みとするスタイルを筆者は好むのである。何故前者のスタイルを嫌惡するかは其平行四邊形上體直立全ての場合では無いが多くの場合に何等意義もなく從つてが合理的スタイルとは云ひがたいのが其理由の一つであるが他面には何等の理由ない感情も其大きな原因である。特に何の必要も無い時奴凧式に腕を伸す事は衒氣と氣障とが筆者に嘔吐を催させる爲である。

然し、筆者には實に不思議であるが此筆者の嫌惡するスタイルが理想のスタイルとして稱せられて居る地方がある其理想とする根據が奈邊にあるか、恐らく筆者の好むスタイルに對する理論的根據と同程度に理由も有らうが一面には單なる好みと云ふ主觀が大きな因子をなして居るであらう。

如上の一例で此の兩者が審判したら實に不合理な結果を來す。又個々のランナーの習性により種々のスタイルがある。そしてそれ〴〵皆科學的（大げさな言葉であるが）に其根據がある以上其の何れを最上とするか仲々困難である同時にランナーによつて其の合理的スタイルも區々になる故にかゝる問題を主觀の命ずる儘に審査する事は實に不合理も甚しい。審判の根據はあたかもジャムピングのスタイルジャツヂングに於けると同樣、其の主要點を客觀的見地に置かねばならない。

客觀的審判の最も主要なるものは即ち、スタビリチイ（均衡度）とステツヂネス（確實度）である。此問題を等閑に附してスタイルジャツヂングをする時は何等の意義も無い。今回のスラロームコンテストジャツヂマンが全然之を考へなかつたとは思はない。然し此れを甚だ輕視した事は其の結果が示して居る。テレマークに於て伴選手は其のスタビリチーが一度も犯されなかつて而も次のスピードレコードを有する。而して第三コーナーに於て少しくバランスを失つた菅場選手より一秒の大差を有したにかゝわらず入勝せず、六回のコーナーに於て第三コーナーと第四コーナーで二回相等な程度でバランスを失つた佐藤選手が共に全ジャツヂマンより最高のマークを受けて居るのを見ても明である。伴選手の負はジャツヂマンの好む腰の低さを有しなかつた事に起因して居ると想像するに難くない。

スタビリチーとステツヂネス、此の事はスラロームのスタイルコンテストの大部分である。他の問題はこの次と見る可きである。

斜滑降に兩腕を振り腰を振つてスピードを出す事等は主觀的に見て恐らく何人も感心せないと思ふが、樺太選手の殆ど全部が之を敢てしたにかゝわらず優秀なスタイルとなつたのを見ればスラロームをダウンヒルターンと同一視して斜滑降を無視したジャツヂマンには問題外の些事であつたらしい。此樣な事なら一層皆斜滑降の部分を走らせれば良いと思ふ。腕や腰を振るのも走るのも同じ事である。

筆者は豫定以上の紙數を費したが故に之以上述べ得られない。只斷つて置き度い事は、今回のスラロームのスタイルジャツヂ諸氏が審判方法の根本を誤つたと信ずる迄を指摘し合せて今後のスタイルコンテストの參考に供したのであつて、不正な（人格的に）審判を行つたと思はれては迷

惑な事である。人格的に不正なジャッヂメントは即ち自己の關係あるチームを利する樣な方法をとる事である。此點は實際かゝるジャッヂングを經驗せない人にとつては考へられない事であるが、自己の關係ある選手には往々實際以下にジャッヂする事は出來るが、實際以上には絶對にジャッヂし得ない事である。此點に於て今回の如く、多く選手に關係ある人々がジャッヂングを行はれたに就て其ジャッヂマンに對し感謝と同情と辯護をして筆を擱く。

スキー選手權大會のコースに對する私見

岡村源太郎

今冬二月十六、十七日に高田に於て開催せられた第二回全日本スキー選手權大會では、信越はディスタンスレースに目覺ましき活躍を爲した。そしてその成績が原因となつて、信越はジャンピング、スラロームに僅か三點を得たのみなるにも拘はらず總得點四十三點といふ他の追從を許さぬ結果となつて優勝の榮を擔ふた。何故に信越がかくもクロッスカントリーで大勝を博したかに就いては、既に各地方の出場選手の充分察知せられ居らるゝ事と思ふが、要するに他地方選手の高田のコースに對する練習不足、當日の天候或はランナーの技術使用せるスキーの相違等からしてかゝる結果となつたものと認むべきであらう。

此處に私は今度の大會に現はれた成績を見て、クロッスカントリーに對する各地方選手の技倆云々を考へる事は止めて、單にレースの上に極めて重要な意義を有して居るコースに就いて感想を述べたいと思ふ。長距離ランナーのディスタンスレースに於ての成績は單なるそのランナーの技術のみで決するのでなく、技術とコースとの間には極めて密切の關係の存するものである事を想ひ、私は高田のコースは如何なるコースであつたかを考へるに止めたい。加ふるに昨年の開催地なる小樽のコースに對する感想を述べればその各コースを走つて優勝した選手の技術に對する私の考へも大体示される事と思ふ。且つこの一ッの愚見が將來の選手權大會に採用せらるべきコース選定の上に幾分なりとも參考になれば幸ひである。

又此處では明かに消滅すべき運命を有する短距離、中距離のコースに就いては特別に述べる事を避けて、大体十キロコースに全てを代表せしめて考へたい。

一、スタート及びゴール

小樽のコースはスタートとゴールは同一場所であつた。隨つてスタート及びゴールの標高は相等しく、高行の高さ及び下降の高さは全く相等しい。この形式は現今歐州の長距離競走に於て廣く採用せられて居るコース選定法であつて長距離コースに於けるスタートとゴールの標高の成るべく相等しかるべき事は、既に國際的に認められて居る所のものである。レコード比較の上にも極めて統一が取り易く同一地點に歸るコースは練習も極めて便利多く、如何なる長距離のコースにあつても甲點より出でて甲點に歸る事が全コースに通じて練習と成り得るのである。

高田コースは之に反して、スタートは南葉山中腹のゴールを去る事約七キロの所にあつた。ゴールとの高度の差は約五百米で下降の高さが極めて多い。隨つてそこに現はれたタイムも權威が無くレコードの比較は全然無意味の事になつて居る。又ゴールとスタートの甚だしく相離れたる爲ランナーは全コース練習の際には常にスタートまでの無意味の登行をせねばならない。殊に單獨にての練習の時にはコースに沿ふての設備は全く無い爲、衣服の處理、食事等に無駄の煩勞を忍ばねばならぬのである。この苦痛は他地方より參加せる選手に取つて一層大きなものであつた。練習の際のみならず出場選手は、競走の夜を南葉山麓の後谷の農家に過さねばならなかつた。せめて後谷が通信交通の便ある地ならば猶さしたる困難もなかつたのであらうが、今度の高田の狀態にあつては選手のみならず主催側の役員も充分なる統一は計り得なかつたと思ふ。殊に今後十キロ以上の長距離が盛んになり行くものとすれば、かゝる形式のコースは一層排せらるべきものではなからうか。

このスタートとゴールとの關係の上から考へて見れば、長距離コースとして小樽のコースは充分に目的に適したものと云ひ得る。唯ゴールそのものをもう少し深く考へて決定したならば、小樽のゴールは猶氣持の好い申分なきものとなつたであらう。

二、各種斜面の配置

登行及び下降の高さは小樽のコースに於ては全く等しかつたにも拘はらず、その兩斜面の長さは決して等しくはなかつた。反つて登り斜面即ちアップヒルが多かつたと思ふ。

スタートからはアップヒル、レヴエル、ダウンヒルが交互に續いてゴールに終つて居たが、全体として緩い登行面が多く之に對して地獄谷の急坂がダウンヒルの大部分を爲して居たやうに見える。隨つてこのダウンヒル及びアップヒルの配置の具合で小樽のコースは登りが多くある如く見えた。所謂降りコースに馴れ切つて居た信越選手が、登りばかりのコースだとまで評したのも無理はない。要するにスタートとゴールが同一地點なるにも拘はらず、そのスロープはアップヒルの方が長かつたといふ事實は、比較的登りに優れて居た選手に有利なものとなつて居た。又輕い短い、且餘り滑りの好くないスキーがどつちかと云へば小樽のコースに適して居たのである。隨つて小樽のコースに於てはレコードは余り好いものを求める事は出來ないのである。

高田のコースは勿論ダウンヒルが多かつた。アップヒルとダウンヒルの配置は割合に單調とも見られたが、兎に角高田のコースは大抵降りでランナーの優劣が決した。下降斜面に馴れたランナー、長い滑る一方のスキーを穿いた者が勝つやうになつたのである。登り及び降りに巧みなランナーよりは、寧ろ降りのみに拔んでたランナーが有利であつた。

又ダウンヒルは急坂が多く、轉倒し易い所が多かつた爲（殊に吹雪の際に）眼鏡を使用せる選手は轉倒に依つて極めて絶望的地位に立たざるを得なかつた。

平地滑走は小樽高田何れも相當の距離は含まれてあつたが、欲を云へばもう少し長くても好いと思ふ。殊に平地滑走かディスタンスレースの極めて重要なる部分を占めて居るのであるから、現在の我國選手權大會に採用すべきコースは割合平地滑走を多く含むべきではなからうか。

猶各種斜面の眞の意味の配置に就いては、余程注意を要する點も少くないのであるが、要は從來コースを選ぶ人とコースを走る人が全く別な立場に有り勝ちであつた事より放れて、コース選定者も充分ランナーとしての氣持を解して、コースを選ばれんことを望むのである。兎に角小樽のコースにせよ高田のコースにせよ、この問題に對しては何

れも猶考ふべき余地が存して居ることゝ思ふ。

三、コースの狀態

小樽のコースの登り斜面は概して、その狀態は申分ないものであつた。二人のランナーが相並ぶ事があつても接觸せざるを得ない所は殆ど無かつたであらうし、尾根のコースも廣く實に自由な登行を爲し得たと思ふ。

之に反して高田コースの登行斜面はスタート近くの一部を除いては余り感心出來ぬものであつた。運が惡ければ谷下へ墜落しさうな狹い尾根が、更にブッシュに妨げられて居て、之でも競走する爲に與へられた道かと思はれる所もあつた。爲めに苦痛の多い登りを更に甚しく不愉快ならしめ、如何にもディスタンスレースの登りといふものは嫌なものであるといふ事をランナーに感ぜしめたのではなからうか。尾根の狹い事は地形の然らしむる所であるとは云へ、せめてヘリングボーニングでスキーが樹枝に引掛かるやうな心配は無いやうにして欲しい。コース選定に當つてその局に當るべき人は常に手斧の一つ位は必ず携帶すべきものであると思ふ。

平地のコースは小樽は思はしくなかつた。馬橇道に沿ふて居た爲にランナーも不愉快な橇道を走らなければならぬ所も少くなかつたであらう。時には馬橇も通り爲めに動もすれば折角のレースも氣乘りがしなくなる事も有つた。高田の平地滑走のコースは大体滿足してよいであらう。國見平の廣い谷は實に申分の無い地域である。選手も實に氣持のよい平地滑走を爲し得た筈である。そしてあの綱子川上流に架せられた橋がもつと完備した渡り易いものであつたならば殆ど非難すべき點は見出し得なかつたであらう。事實我々も練習の際に橋より危く水中に落下せんとした事もあつたのである。架橋の完備ブッシュ除きといふコースの手入れは、ランニングでトラックを修理し或はジャムピングヒルのバーンを直すと同樣に必要欠くべからざる事である。コース決定の際更にスコップの携行も決して無駄の事ではない。

下降斜面の狀態は如何か。之は小樽も高田も同樣に感心出來ぬ所が多かつた。小樽のコースでは馬橇道を成るべく通るやうな場所のあつた事は平地コースと同樣で、且地獄谷の降りはやはり競走する爲の道としては少しく考へる余地があらうと思ふ。單にスロープが急であるならば各選手間の衝突等は殆ど考へられぬけれども、僅かに一人のランナーの通過を許すのみの場所では、レースに面白からぬ結果の生じ勝ちなのは當然の事である。然し絶對にコースは廣くなければならぬとは限らない。地形の狀態に依つてはその斜面が平地或は緩やかなる登り降りであるならばコースの狹くなる事も或程度まで許さるべきであらう。

高田の降りは南葉山腹の部分は、スタートがゴールより高い所に在るコースとしては、大体申分のないものであつた。唯吹雪の時には目標が失はれ勝ちであつた爲、コースに對する研究を充分にするよりも唯數多き練習に依つてコースに馴れるといふ事が有利であつた。之は全て急傾斜の下降面の欠點とする所である。又四キロコースと共通なる場所には七曲り、大雪崩と稱する特殊的地形の場所があつた。之等をコースに入れる事は望ましい事でなかつた。危險なるコースを選んで得々として居るのではあるまいか。成程七曲りや大雪崩を平氣でパスし得る人は技術が優れて居なければならない事は事實であるが、優秀なるランナーが必ずしもあのコースで勝つとは限らない。少しスキーを誤れば谷に落下する樣な狹い七曲りに、或は三〇度以上の急斜面の下が林になつて居る大雪崩に、多數のランナーが先を爭ふて滑つて來たとすれば、其處で必ず不祥事が生ずると云ふても過言でない。四キロの時に七曲りに於て負傷者のあつた事に就いては、之は全てランナーの罪であらうか。否コース選定者はそのコースに對して充分の責任を負ふべきである以上は、選手負傷に對しては決してその責を免れ得ないであらう。然し大雪崩以下のコースは十キロコースの一部としては先づ理想に近い降りであつた。

四、雪の狀態

コースに雪が充分なりや否やは唯その積雪量に依つて決するものではない。平地のみのコースにあつては一尺に滿たぬ積雪で充分であらうが、高田のコースでは最小三尺と云ひたい。然るに練習當時雪の全然消失せる場所等が生ずる程なりし事は、高田のコースは雪量は全く不充分であつたと云ひ得る。小樽のコース（今年も）は云ふまでもなく充分の積雪があつた。

雪質も今更云ふまでもない事である。小樽が優れて居た事は火を見るより明かである。殊に雪質の不良、變化の甚しき事はディスタンスレースのみならずジャムプ、スラロームの方にも面白からぬ結果を來し易いものである。信越の雪はスキー術研究の上には決して排すべき雪ではないがスキー競技を行ふとなれば殆ごその資格を失はねばならぬのである。

五、國際ルールとの關係

以上各項目に就いて大体の意見を述べて來たが、更に項を別にして國際スキー競技規定に高田及び小樽のコースを照し合せて見よう。山とスキー三十六號には幸ひにもその譯が出て居たので別に詳しく述べる必要は無いが、この稿の終りに一寸讀者の注意を引かれるやうにと附言を許されたい。即ちルールの中コース決定に關係ありと認められるものは

一、コースは登行、滑降及び平地を必ず同等の割合に含むべし。長き急斜面の登行を避くべし。人工的障碍を作造することを得ず。

二、スタートとゴールは同一地點たるべし。如何なる場合にもスタートとゴールは同一標高たるべし。

三、全コースは霧或は降雪中にても識別し得る樣充分に記號を設くべし。

四、全コースはレース前に充分多數のスキー家によりスプールを附し且つ管理すべきなり。

第一の條件に對しては小樽も高田も充分滿足とは云へない。高田は降りが多く、小樽は登りが多い。然しこの點のみで考へても小樽のコースは高田の上位にある。第二に對しては小樽は全く國際ルールに適合して居る。嘗て小樽に來て『スキーは快走するものなり、小樽のコースはスタートを毛無山の上にでも設けらるべきであつた』と稱した某スキー大家も、この規定の示す所を見れば小樽のコースのスタートとゴールが同一地點なりし事を責むる事は出來まい第三條件に對しても高田のコースは小樽よりもそのコースに對する記號は不充分であつた。十キロレース中或地方選手が監察員にコースの方角を尋ねた事さへあつた。然し小樽のコースも全く記號（旗）が充分であつたとは云はれない。

第四に對しては小樽も高田も充分に責任を以て行つて居なかつたらしい。レース前のスキースプールを明かに附す事及びその管理は競走當日役員として一大任務である。スプール無きコースを走るランナーの苦痛、或は亂雜な反つてランナーを當感せしむるスプールに對する不愉快を想ふては、この第四の條項の極めて重要なる事を容易に認め得るであらう。兎に角、苛も全日本の名を冠する大會に於ては、國際競技規定を考へず行ふのは余り感心し得ない。

以上種々なる方面より高田及び小樽のコースを觀察した多くの欠點に對して、必ずや私と同感の人も居られる事と思ふ。然し決して之等の欠點全く無き理想のコースは何處に行くとも求め得ぬ事は私も自認して居る。唯私は將來幾分なりとも速かにその理想に近づいてくれたら、それだけ我國クロッスカントリースキー界は速やかに正しい目標に向ふ事が出來ると思ふのである。

三十二號記載のコースの地圖は印刷の際に縮少し過ぎた爲に一寸變になつて居りました。說明と一致せぬ點があると思ひますが、その所御含みを願ひます。（H）（二四・四・六）

寫眞說明

十勝岳より見たる奧十勝連山

二月十日。午後一時頃十勝岳の頂から撮つたもの。晴。大氣の濕度高し、イーストマン、フイルムパック。五倍フイルター。f:5.6 1/50 メトロールハイドロキノン現像液を五倍位にうすめて臭剝を澤山入れて現像した。原版は曝寫過度で素敵にかぶつて眠くなつてゐる。（N生）

スキージャンピングの批判に代へて

廣田戸七郎

世評の喧騒たゞならぬ内に、兎も角も第二回全日本スキー選手權大會は、スキーの發祥地と云はれて居る越後高田市の郊外に於て、開始せられそして終了を告げた。

私はこの大會に出かけて、大會の諸狀とそしてそれに關聯した事態の多くを視察することが出來た。

又同時に現狀の日本スキー界の大勢をも見ることが出來た。

世界のスキー界は完全にスキーのスポート的方面の發展を語つて停止するところを知らぬ有樣である。

吾等はスキーテクニックの研究、發達の立場にあつて、他の諸外國のスキー界の狀勢と、我が國スキー界の勢狀とを比見するとき、彼と比肩し得るを知れど、一歩進んでスキーのスポート的方面の丘頂に立つて視察せんか。遺憾乍ら彼と伍し得ざることを容易に知るものである。

已にスキーテクニックの一般的研究は、十年の星霜を經たる今日に於て、築立せられたり。而して更に爲すべき事

否來るべき時期夫れは何んであらうか。今更多言するまでもなく、スキースポートの充分なる研究と、完全なる理解の事である。

然らば吾等の實行すべきスキースポートの問題は何か、私は容易にスキージャムピングと、クロツスカントリーレースとの二大種目を提供することが出來る。この二つの大な對象をとらへて、邁進することが吾等の當面の爲すべき緊要事である。

吾等が十年の後に於て、全日本的の面目を以て、諸外國のスキー界と比肩せんとするならば、この二つの方向に突進せねばならないと思ふのである。

而してこの問題の成果を具体的に立證すべき、一つの手段方法とも見べきは競技會であらう。而も夫れは、眞劍なそして神聖な意義を有するものでなければならない。

即ち競技を開催する人々、競技に參加するもの、競技に關係する人達、更に競技を傍觀する人達凡べてが、競技の本質を充分に理解し、公正にして眞面目なる態度を以て、是に接せねばならない。

尙又吾等が世界の舞台を目指して躍進するとき、徒らに一地方又は一團体の立場をのみ考へてはいけない。吾々は須らく、日本スキー界の一スキーランナアたることを念頭に置いて日本スキー界の爲に爲すところがなければならぬと思ふものである。

私は高田の大會の事について、特にスキージャムピングの問題について、何か纏めたいと思つたが徒に此の事にとらわるゝことの多きを厭ふて、此處にスキースポートの一般的研究とそして理解とを望んで責を果す次第である。

尙私はスキージャムピングに於て、最も問題を惹起し易いスタイルヂャッジについては、何れ機を見て卑見を述べる積りである。

最新スキーの知識

『十四、ジャムプ』の章を讀みて

廣田戸七郎

私はつい先日、吾々スキーランナアの先輩とも云ふべき往年の富士登山に於て僥名高き、高橋翠郊氏著「最新スキーの智識」なる一書を幸ひに通讀する機會を得た。

この文獻全体に對する概評と云ふか、感想と云ふか、兎

◆北大スキー部近着圖書◆

Alpine Journal No. 226 No. 227
The British Ski Year Book 1923 Arnold Lunn より寄贈
Der Winter 16 Tarhrg Nr.14
Der Winter 17 Tahrg Nr.1—Nr.8.
Korrespondenglatt des Schweig. Ski-Verbandes 20 Tahrg. Nr.1.—Nr.14.
The National Geographic Magazine Sept. 1923—april 1924
Andersen Skil-puing 1924 著者より寄贈
Foreningen til Skiidraetens Fremme より寄贈の分
AARBOK 1922. 1923.
Norges Skiforbund. AARS-Beretning for 1923
Internationale Wettlauf-Bestimmung
Reglement International Des Concours De Ski
Norges Skiforbund. Rules for Skiing Competitions etc 1923

に角さうした種類の事柄について、何か纏めて見樣と思つたが、餘り廣範に渡つても感心せぬと思つて、むしろ自分自身の立場を知つて、自分の專攻として居る處の事柄についてのみ、少し書かして戴かうと思つて、此處に該書中のジャムプの事柄について、卑見を纏め他の事柄については夫々專攻の人々に讓ることにした。

氏が「十四、ジャンプ」の冒頭に於て述べて居らるゝ事即ち「天才的ジャムパーは直斜滑走後專門にジャンプの練習をする方が良い。と言ふ說もあるが、矢張り一通り知つてから行く方が良いと思ふ」云々は誠に御同感の到りで、稍々もすれば基本動作の習得を棄てゝ、速にスキージャムプの練習に入らうとする、亂暴者流への良警告であると私自身も考へる次第である。たゞ氏が「一通り習つてからの方が良からう」と次の行に述べて居らるゝことには、些か同意し兼ねるのである。明に氏の一通りと云ふ御說はテレマークとかクリスチアニアとかと云つた、テクニツクをも合せ考へて居らるゝものであらうが、私はスキージャムピングをやらうとする人に、そんなテクニツクまで、一通り知らなくとも、本當の基本動作の習得によつて充分と考へるのである。或は氏が一通りと態々述べて居らるゝのは、或は氏の老婆心からかも知れない。私の知人の中には、テレマークとか、クリスチアニアのテクニツクを知らずに基本動作の十分なる習得によつて、立派なジャムプをやる人を見出して居る。

次に場所の問題についても、言々盡して述べてあるが、練習用のジャムピングヒルの爲なら、氏の御說明ほどにアプローチを六〇米も、ランディング斜面を七、八〇米も選ばずとも良からうと考へられる。

「東北以北を除いては雪が濕つて水分の多い時は、ジャンプは仕度くない。夫れは、水分の爲めに、スキーが雪にへバリ着いて、離陸が豫想通り行かず」……云々、至極御尤もな御高說で、私は是だけの理解ある文を、この章に參見することを得て嬉しく感ずる次第である。

「スキーについて」の部分は、氏の昔の著「スキー家に」と云ふ文獻の中に書いてあつたものに比較したら、まあ無難に書いてある樣に見受けられる。

ジャムプの姿勢は、離陸前の屈身、空間の伸張、着陸の反動を受け、の三つである。此三姿勢が甘く行つて」…云々

この外に最も重要なサツツ、即踏み切りの時の姿勢が忘れられて居ることが、第一に不思議でならない。若しも眞のスキージャムピングのスタイル審査を行ふものとすれば恐らくこの踏み切りの姿勢の如何が、第一に考慮せらるべく、他は全く後の問題ではなからうかとも考へらるゝので

ある。

〔屈身姿勢〕踵が臀につく位膝、腰を屈し胸、肩は張り出る位にして……」如何にも讀んで行く內に苦し相な姿勢であることを容易に推察することが出來る。

「兩手を前に伸す人もあるが何れにしても利害はある」適當なところで說明が切れて居る。私には、此處にその利害についての比較說を見出すことの出來ぬのが、何となく物足りない氣がする。

〔空間へ〕屈身で滑べつて來たスキー家は、此時一擧に体を伸張し兩手は側擧する」此處まで姿勢を讀んで來ると益々苦し相な動作が想像せられてならない。

「踏み切りは、踵をスキーに踏み付ける樣にして、脛と膝の後ろの筋肉が緊張する樣にする。普通陸上のジャムプに於て爪先で踏み切る樣にするのとは、全く逆操作をとりつゝ伸張するのである」何だか少からず曖昧模糊たる高說に感ぜられる。恐らく氏は初步者に爪先で踏み切る爲に、走巾飛び樣の踏切り方法に陷ることを慮つて、かうしたことを說いて居らるゝのであらうと思ふが、それならその樣に爪先で踏み切らぬ方が初步者には都合がよからうとするべき方法とかを云ふ數言があつて望ましいと思はれる。然し最後の「逆操作をとりつゝ伸張するのである」云々は全く私には解し兼ねる。

更に行を追ふて先へ行くに從つて、氏のジャムプに對する、御理解が容易に察せらるゝ樣な氣がする。

「スキーが傾斜に對して、先が高く水平以上に上向きして空間へ出る樣に、離陸する事が出來れば、もう無難なのである。斯うなる迄が中々問題で、兎角、陸上の踏み切りの樣に爪先で踏み切つて、スキーが下向いて空間に出る時代が長いのである」

この御高說に對する解說を今更、私が逐一此處に述ぶるまでもないと思ふ。要するに、もう少し陸上の踏み切り方法と、スキージャムピングの練習者のスキーの位置の事柄について、少し注意深く御觀察あらんことを。氏並びにこの說を「眞」と御考へになる方々に、御願ひするだけで止めて置く。

〔空間〕ではスキー家は一種の落下物体で、或程度迄は其勢ひに……出來るだけ意識して、体が傾斜と直角にある樣に、上体を前或は、後ろに修整しなければならぬ」云々その修整については如何にしたらよいものであるか、次の行を讀んで行つても、正しい位置に体が斜面に對して置かれたとしても、是非必要な腕の動作と云ふことが閑却せられて居るやうである。たゞ思ふ樣な姿勢になつた時は云々と述べてある。然らば思ふ樣な姿勢になれなかつた時は、如何ですかと御尋ねしたくなる。

〔着陸〕テレマーク姿勢をとつて膝で堪へるのが、最も有利とぜられて居る。之はほんの一瞬間で充分である。此後は任意な滑走方法で宜しいのである。

テレマークジッツエンから体の起し工合の、最も大切な問題が閑却せられて居やせぬかと、私には考へられる。

最後に次の文章を讀ませて戴いて、非常に嬉しかつた。

「私の友人の原豊次君は、此着陸の前に、ジャンピング、ラウンドの形式で方向を變へて成功したが、衝動の爲めと臺下が比較的軟かであつた爲めにスキーを折損した」

何だか空中で体の姿勢を變へることが、偉いランナアの様であるが、落下してスキーを折損する位なら、宙返りジャムプの形式で廻轉しかけて、臀部から落下して、スキーを折らなかつた。初歩のジャムパアの方が、むしろ偉ら相に考へられるかも知れない。妄言多謝。

（一九二四、二、廿二）

彙報抄錄

○ 會員農學士並河功氏は外遊中のところ去る四月三日無事歸朝せられました。

○ アイガー●オスト●グラートのマキローテは最近一般登路としての設備を施され、該登攀の際露營せられたる地點に、マキ●ヒユッテを建設すべき計畫ある由。

○ 慶應及學習院山岳部員は三月下旬穗高登山に成功せり。

○ 北海道林業會にては今夏北海道野幌原生林内に於て野營生活をなしつゝ、夏期大學を開講さるゝ計畫あり。

◆正誤　前號所掲、國際スキー競技規定中 Ansatz を屈身姿勢と譯したるも右は踏切りの誤りにつき訂正致します。（かの生）

◆編輯後記

△十勝岳の記事は本誌が第三年の最終の號であるため紙面の都合止むなく抄略した個所があります。讀者並に筆者に對してお詫します。

△第卅一號と卅二號とに總頁が重複したところがありますゝも編輯の落ち度です合せてお詫びします。

（編者誌）

サンドストラム會社

瑞典サンドストラム會社製

日本總代理店

スキーが新輸着致しました

同社製品は畏くも

秩父宮殿下

の御下命の榮を賜はりたる逸品にして又世界的山岳家として我國の權威たる

槇有恒氏

の御賞讃品にして又御愛用品でございます。

美津濃特製スキー……九圓ヨリ十七圓マデ

東洋最大　専門大商店

美津濃

本店　大阪淀屋橋
大阪南支店　日本橋四
東京支店　神田小川町
神戸支店　三宮路切南

工場大阪浦江町　卸部大阪淀屋橋